

2007年11月15日  
第173号

題字 住谷悦治



燎原社  
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局

京都市左京区高野東開町1-23

第三住宅33-302 井手幸喜

TEL 606-8107

tel & fax 075 (722) 3823

【連載】

私保労結成前後——ひらのりょう「さん」に聞く（上）  
樹々の緑を——戦後京大学生運動私記—— 第3回

滝川事件以後  
十五年戦争期京大学生運動の断章（五）

忘れ得ぬ人

安井信雄先生

10

川合葉子

小畠哲雄  
岩井忠熊

11 7 4 2

例会案内／情報スクランプ／編集後記

BOOK 真田玲子『歌集 希い』

12

連載

# この一枚

「民主運動史を語る会」  
創立総会の写真発見

住谷悦治、木村京太郎氏らの姿も

1980



正面左端から井垣次光、木村京太郎、住谷悦治、一人おいて細井友晋氏らよびかけ人が並ぶ。

## 執筆者紹介

ひらのりょう

小畠哲雄（おばた・てつお）  
元京都大学同学会執行委員。長く大阪私学  
教職員組合委員長などをつとめる。八幡市  
都市北区在住。

岩井忠熊（いわい・ただくま）  
在住。

川合葉子（かわい・ようこ）  
本会代表。立命館大学名誉教授。右京区在住。

原子物理研究者。原爆展語り起こしの会。  
京都市北区在住。

1980年2月20日、立本寺で開かれた「京都の民主運動史を語る会」の創立総会の写真が故・湯浅貞夫氏の遺品の中から発見された。当日の出席者は二十数名、山田幸次、稻田達夫の両氏を進行役として、木村京太郎氏が「いまこそ京都市の民主運動の伝統を語り伝えよう」と趣旨説明、次いで住谷悦治氏が四〇分にわたり大正デモクラシー時代から、ファシズムの時代にかけての自らの体験を語った。

この写真は湯浅氏が撮影されたものと思われるが、「燎原」には掲載されておらず今回が初公開。湯浅氏が遺されたダンボール35箱にのぼる史料類はこのほど京都市内の倉庫に運ばれ、有志の手で整理がすすめられている。

# 私保労結成前後

上

## ——ひらのりよつこさんに聞く——



福祉や保育をめぐる状況も年々厳しくなってきています。保育につい

ては、公的責任が担保されていますが、その制度をつくり、守るにあたっては、保育所に働くなまの運動は非常におおきかったと思います。

一九六一年組合を結成される前後のひらのさんのお勤めになっていた旭ヶ丘保育園の状況等からお話を頂けたらと思っています。

### 組合結成の前後

ひらの 私保労を結成したのはお

しゃるように一九六一年の秋十一月八日でした。正式な名称は「京都私立保育園保母労働組合」。全国で初めての民間保育園の保母の労働組合でした。参加したなまは三七名。結成して一周

年、定期大会の準備にあたって、そのためを纏めた文章が資料として残っています（「私保労結成一周年定期大

会を準備しよう）

この時期、私の勤めていた旭ヶ丘保育園の状況やその旭ヶ丘保育園のできる経過などについては清水新一先生を中心にして『がたろのう』（旭ヶ丘保

育園出版委員会編、九二年七月）をおまとめになっていますので、詳細はそちらをご覧頂ければと思います。保育園の設立された時（五三年八月京都府

認可）は、まだ私は中学一年生でしたので。

私のことでいえば、同志社女子大で英米文学を専攻していくシェークスピアを学んでいた。だけど早く社会に出で、何とか人の役に立つことをやりたいという思いが強く、大学を中退して、二十歳、公募で左京区にあるだん王保育園に入ることになります。一九六〇年の四月です。

——何故だん王保育園を選ばれたのですか。

ひらの 夜間保育をおこなっていた保育園だったので、社会の役に立ちたいという思いとぴったりあつたのが志望理由でした。保母として働き始めたところから、その労働条件を何とかしないといけないという動きはありました。

同じ左京区の民間保育園に勤めていた塩野さんたちと、公務員並みの給与を

という希望など、貧しい福祉行政を何とかしたい、そんな働く保母の労働条

件を語らう会をおこなった記憶はあります。ただ、私は一年足らずで、私の育った地域の保育園、旭ヶ丘保育園に移ることになりました。

北区大将軍での白い鳩保育園の設立でも仁和診療所の果たした役割がお

おきかたと聞きますが、旭ヶ丘保育園の場合は、待鳳診療所になりますよね。移られた時期の地域の状況、保育園に通う子どもたちの状況はどうだったのですか。

### 子どもたちから命の大切さ学ぶ

ひらの 保育園の設立にあたって診療所の果たした役割は大きかったでしょうね。地域になくてはならない施設でしたからね。所長は山本浩治さんとおつしやつた。山宣の息子さんです。最も鮮明に記憶に残っているのは清水綾子さんという看護婦さんでした。この方に聞けば、地域の人たちの生活状況はほぼ分かっただ。私の家は、待鳳小学校の道路を挟んだ向かい側、地域の様々な運動の中でいろんな出会いがありました。果物屋さんだった平田のおつちゃん（敏夫さん、京都市議会議員）その近くに内職友の会もありました。

私の家からちょっと上がったところにはタバコ屋さんだった安井真造さん（のち共産党京都府委員長）のお家。

当時の旭ヶ丘は、西陣織に関わって

生計をたてる人、一人親方が多かつた

地域でしたね。夫婦で賃機、それで生

きていました。保育園に通う子

どもたちの親のかなりの部分を占めています。ただ、私は一年足らずで、私の育った地域の保育園、旭ヶ丘保育園に移ることになりました。在日の方の子どもたちもいました。在日の方の子どもたちもいました。

保育園へはいつもよそゆきの服装で通っていました。ライムのオーデコロンをつけていました。イアリングは、落ちて子どもの口に入ると危険なので止めなさいと言われ、ならばと止めました。マニキュアも微妙でしたが薄いのを塗っていました。子どもたちに、ええ匂い、きれいといわれるのが嬉しく、園の帰り、洋服に子どものうんこ

が付いていても平気、ハンカチで拭いて、そのまま、映画に行つたりもしていました。保育園の子どもたち、私も

とつては生きとし生ける、他の命そのものでした。自分のことより少しでも

いました。他の命を慮る心。私はそのことを、この町で、子どもたちに教わったと思っています。

——組合の結成に至るまではどんな経過があつたのですか。

ひらの やっぱり安保闘争などの国際的な盛り上がりが大きく影響していました。労働組合をつくらないといけないという動きは、旭ヶ丘保育園と同

### 安保闘争の高揚が背景に

この時期、私の勤めていた旭ヶ丘保育園の状況やその旭ヶ丘保育園のできる経過などについては清水新一先生を中心にして『がたろのう』（旭ヶ丘保育園と同

じ北区の白い鳩保育園でも始まつていました。保育園が設立された経過もあって園長の理解もあり、当時の事務長さんなどは、積極的に関わっていたのではなかいかとっています。旭ヶ丘保育園と白い鳩保育園は保母の交流も活発で、珊瑚彰子さん（山之内保育園、旧姓堀さん）を中心とした組合結成の準備がすすみ、前に名前を出した内職友の会で、組合をつくろうということが確認される。十一名の参加だったと思います（十月十九日）。

組合の結成大会は千本寺のお寺さん福正院でした。委員長が大徳寺保育園の主任さんだった古川静子さん、私は副委員長、書記長が谷口浩子さん（白い鳩保育園）、京都新聞では「保母さんが労働組合、ガマンできない、待遇改善、不合理だらけの実情」「健保も保障もない」と、組合に好意的な報道してくれたことが記憶に残っています。当時大将軍にあつた白い鳩保育園の二階を間借りしての組合の出発です。

幼児三〇人につき保母一人、乳児一〇人につき保母一人、京都市の委託児童施設としての保母の給与は平均七五〇〇円（調理師は六三〇〇円、その他雇用は五八〇〇円）。勿論期末や通勤手当もなし）婦人労働者のなかでも最

底辺といわれる状態で、かつ、大切な子どもを預かる保育の責任は人一倍大きく、労働時間も朝早くから夜遅くまで、居残り手当ては年間一人につき千円。生理休暇や昼休みもない一年ぶつ通しの本番勤務の連続。結成の時には、公務員並みの大賃上げ、越年資金一人一万円、保母の受け持ち児童数の改善（幼児二〇人に、乳児五人に一人）を掲げての出発でした。

文章だけど、私たちの思いを込めたものだつたと思います。



保育所の増設と改善を求め、京都保育所要求大会も開かれた（1960年）

一九六一十一月八日、京都に保育所の労働組合が生まれました。

長い長い年月、子供たちとお母さんの幸せを願つて、苦しい労働に耐えてきた私達。私達は耐えるだけでは真に子供たちやお母さんの幸せを守れないことを知りました。

過労で倒れていく保母をみて

保育料が高くて入所できない子供をみて

一五〇人ものの児童の給食を、毎日たつた一人で用意している調理士をみて、要求することによつて始めて子供の幸せ、私達の幸せが守れることを知りました。

さあ、一人でも多く集まりますよう。

組合のこの頃の文章は主にどなたがお書きになつたのですか。

### 保育所と保母の現状から出発

ひらの　主には私でした。何しろメモ魔といわれていましたからね。委員長になつて頂いた古川さんなんかは、お寺さんの保育園で大変だったんではないでしょうか。ほんとに保育園の前近代的な体質というのは驚くことがたくさんありましたからね。休みなんかも寺の掃除や行事に出ないといけない組合への攻撃、批判など、檀家さんのなかからも出たんでしょう。アカ攻撃ですね。でも、お寺さんが動いて、

——組合のこの頃の文章は主にどなたがお書きになつたのですか。

保育所と保母の現状から出発

ひらの　主には私でした。何しろメモ魔といわれていましたからね。委員長になつて頂いた古川さんなんかは、お寺さんの保育園で大変だったんではないでしょうか。ほんとに保育園の前近代的な体質というのは驚くことがたくさんありましたからね。休みなんかも寺の掃除や行事に出ないといけない組合への攻撃、批判など、檀家さんのなかからも出たんでしょう。アカ攻撃ですね。でも、お寺さんが動いて、

組合を潰しにかかるということは当時「とにかくゆつくり寝たい、休みたい」という声はどこにでもありました。そんな保育所の現状に疑問を抱いている保母、怒りを表さずに我慢している保母におかしいと気づいてもらうこと、出発してから、組合で大事にしていたことでしたね。

——当時、社会福祉の組合運動としては日本社会福祉事業職員組合がありましたし、京都に統いて、私立保育所の労働組合が高知、東京都に生まれてくることになるわけですよね。それらとの連携はどうだつたのですか。

ひらの　全国社会福祉協議会のもとには保母会があつて、これは半官半民の団体でしたので、働くものの要求実現にとつてはかなり限界があるという認識は持っていました。保育労働者の幅広い要求を掲げ、団結してたたかうことができる組織、その必要性からの出発だつたと思っていますが、組合結成にあたつて、直接間接の相談にのつて頂いたのは保育園の園長さんたち、例えば、組合結成当時、園長会の理事長などをなさつていた藤谷俊雄さんたちだつたと思います。京都での組合の結成は、他府県の保母の労働組合の誕生にも少なからざる影響を与えたとは思っています。

——組合加入のよびかけは、短い文章だけど、私たちの思いを込めたものだつたと思います。

（聞き手）井手幸一（次号につづく）

# 樹々の縁を

## —戦後京大学生運動私記—

第3回 小畠 哲雄

### 《学生運動の新しい流れと学園復興会議》

#### 求められた学生運動のあり方の転換

関西学連委員長としての私は、選挙権問題にだけ取り組んでいたわけではない。

一九五三年八月の十四、十五、十六の三日間、平和祭日本大会、そして十八、十九日には全学連の拡大中央執行委員会があり、私はそれらに参加するため上京していた。以前には、関西学連の委員長は、全学連の副委員長を兼ねていたこともあった。天皇事件当時の関西学連委員長であった玉井君がそうであった。彼は、事件の直後に上京し、武井委員長等が不信任されたあと、全学連の委員長に選出されたのである。しかし、私は、関西に専念することにしていた。「拡大」中執ということで参加した会議であった。当時、小山田和子に宛てた手紙には、この連日の会議で、相当の疲れが出ていることも書いている。

しかし、平和祭の大会などでは、最近の情勢と学生の任務、平和と独立のために、という二項目を、基地、水害

の問題を中心に、討論している。その前年の年には、「火焰ビン」の事件などがあつて、平和祭に向けた統一行動が十分に取り組まれていなかつたのに、今や、各地方において、戦後かつてなく平和祭に向けての統一行動がもりあがつていて、元気をもらつた。何よりも「世界の平和は話し合いで」というスローガンが、励ましになつた。

とはいものの、長年の「セクト主義」がそのための最大の障害となつていて、それを克服していくためにも、学生運動が大きくかわっていく必要が求められていた。そしてそれは、同学会再建への取り組みからの教訓が大きく影響していると、痛感された日々であった。

八月の全学連拡大中央執行委員会の決定を受けて、殆んど日をおかずには、全学連の中央委員会が、米軍から返還されてしまもなくの京大樂友会館で開かれたのは、選挙権闘争のさなかの九月はじめのことであった。

私はこの中央委員会の議長団の責任者として、正式の会議だけでなく、そ

の幕あいに開かれる各種の会議に責任をもつて参加しなければならなかつた。それは、たいへんな激務であつたが、この会議で、秋に、「学園復興会議」を京都で開くことが決定された。

また、その会議では、米田豊昭同学会

委員長が、全学連委員長に選出された。八月の全学連拡大中央執行委員会では、まったく出ていなかつた問題であつたが、阿部委員長が中国へ行くために健康診断を受けたところ、「結核の疑い」ありと診断され、急速に辞任することになったのであった。文字通り「寝耳に水」の話であった。まったく急な話ではあつたが、同学会再建の推進者の経験は、全国の学生運動の場に多くの教訓をもたらすと考えられたようである。どこからもなんの異議もなく、決定された。この会議の議長席に

座つて、会議の流れを見守っていた私は、ある意味で、これまでの学生運動のあり方からの転換をも意味しているように思えた。

同学会の再建は、いわゆる学生運動の積極的な分子だけの活動ではできなかつた。教官、職員などとの意思疎通だけではなく、一般の学生との交流、話しあいが重要であった。ともすると、

学生運動とは一線を画することになりがちな運動部とも、意見を交換し、意見の疎通を図ることなしには、実現しえないことであった。それだけではない。戦後の生活苦はまだ残っていた。朝鮮戦争特需で潤つた階層もこの頃生れはじめてはいたが、まだまだ大部分の国民の生活は、戦後の荒廃から脱出してはいかつた。学園もその中にあつた。

「学園の荒廃」と闘う  
「我等が未来のために」は、こう書いている。

学園の荒廃は、設備や、機構や、施設の荒廃ばかりではない。重苦しい社会の重圧による学生の精神生活の荒廃も問題である。精神生活までも荒廃に落し入れずにはおかしい社会の、学園の荒廃が問題なのである。われわれの生活は、決して「一個の小さな問題ではない。社会の中の一個人としての生活ではない。社会の中の一人としての生

活である。しかも、一大学生と云う、極めて恵まれた存在である。われわれは社会の本質を捕え、それを暴露し、そのためには鬪わなければならぬ。

「学園の荒廃」とは、施設設備の問題だけではなかつた。学生の健康の問題でも大きな課題を抱えていた。当時の学生の中で、「結核」を患つていたものは、一体どれぐらいいただろうか。『我等が未来のために』は、「学園新聞」の記事を引用して、こういった事例も紹介している。

文学部の丁君は、学生の健康に關し

て、次のように叫んでいた。『結核罹病は私一人だけの罪ではない。』

いた。本当に全快せぬ私は、安静が必要だった。

私は、保健診療所内に、休養室と云う

札のかかげてあるのを以前覗見たので、そこを利用しようと思った。しかし

し、行ってみるとどうだろう。他室は、

きれいに改装されたようだが、この室

には、ベッドはあるかソファーすら一

つもなく、こわれた椅子などが、片隅

にほこりをかぶって、積み上げられ、

広くなつた中央には、ピンポン台がお

かれてあつた。私はたまらない失望と、

忿懣とを感じた。休養室とは、一体誰

のための、何のための休養室なのだろ

うか。学校の厚生対策も、「こんな所」に、

盲点があるようだ。』又「考えてみると

罹病原因の一つは、それまでの食生活

にあつた」と云える』と述べて、二食主

義の学生たちの現状を憂えている。

食生活の問題までも含めて、学生生

活の復興が切実な問題になつていて了。

十月四日、小山田和子宛ての手紙の中

でも、こんなことを書いている。「私

のもつとも親しい友人、同志であるだ

けでなく、文学の仕事をいつしょにや

つて来た山崎（正和）が病気になつれ

たことです。三十日の晩、一日の昼夜、

二日の午後と四回にわたつて喀血した

のです。レントゲンの結果、右肺門に

浸潤が出ているそうです。きわめて軽

いようですが、三ヶ月は休ませねばな

りません。』

このように、当時の学生の健康もま

た、ボロボロにされていた。復興の課題は、そんなところにもあつたのだ。



学園復興会議総会（同志社明徳館）  
＝「学園新聞」53年11月16日号より

とはいえ、学園の施設、設備の、戦中、戦災も受けず、教養課程の旧制三高は道一筋はさんだところにあって、吉田分校として発足したから、一体感を損なうこととなかつたが、新制二期生が大学入学一年目を過ごすことになる宇治分校が発足してから、状況はかなり変わつていた。もともと、旧陸軍の、火薬の貯蔵庫であった所である。凡そ学校の教室としての条件などあるわけがない。それだけでなく、地理的な条件もよくなかった。宇治分校の学生だけではなく、吉田と宇治と掛け持ちしながらならぬ教育なども、大きな迷惑をこうむつていた。それでも、地方の大学、戦災にあつた大学から見れば、

### 期待された京大の経験

というような具合で、「学園復興」の課題は、文字通り山積していた。

そしてこれらの問題を解決しようとすれば、それは一部の学生運動活動家だけでなく、広汎な一般学生、またと

かく学生運動の側からは、話しにくい相手と見られがちな運動部関係の学生

諸君とも、話し込んでいくことが求められる情勢であった。それだけでなく、教官とも意思を通わせる必要があつた。そういった経験を、京大では、同

学再建の過程で持つていた。全学連委員長に米田君が大きな期待をもつて選出された背景にあつたといえよう。

「我等が未来のために」によれば、

まだ遙かに条件的には恵まれていたといえよう。

一つの府県内にあつた旧制高校、師範学校を含む旧制の各種専門学校、それらを一つにして発足した新制大学は、キャンパスが幾つにも分かれてい

て「たこの足大学」と呼ばれていた。

関西学連の書記局の置かれていた大阪市大も、まさに「たこの足大学」であつた。杉本町の旧制大阪商大が新制大阪市大の中心となるべきであつたが、アメリカ軍が、講和発効後もなお居座つていたので、市内の小学校の校舎などを転用していた。市立の女子専門学校などは、新制大阪市大の家政学部となつたものの、キャンパスは遠く離れたところにあつた。

同月十二日 総会

三日目の大学別分科会では、

a、国立大学

b、公立大学

c、私立大学

d、宗教大学

e、女子大学

f、定時制大学

の問題とに分れて、それぞれ討論を行なう。さらに四日目の分科会では、

文化活動・研究活動・スポーツ・協同組合・互助活動・子供を守る運動・帰郷運動・平和運動・寮生活・夜学生・宗教生活・自治会活動・国際的運動の発展

のための討論を行つた。

これらの討論の内容について説明することは省略するが、従来の学生運動の枠を超えたテーマであつたことは、わかつていただけると思う。

ところで、その第一日目、総会の会場問題で一悶着があつた。同志社大学の明徳館を利用することは、すでに諒解を得ていたのだが、こういつた会議を京都で開く以上、もつとも適當な会

場は、京大法経第一教室以外にない、これは、京大の学生だけでなく、全国から集つた学生の共通の思いであつた。ところが、京大の当局は、他大学の学生が入ることについては、従来からも頑なに拒否しつづけていた。学生

この学園復興会議は、次のような議事日程ですすめられた。

十一月八日 全日本学園復興会議総会 同月 九日 学部別分科会

同月 十日 大学別分科会

同月十一日 分科会

の側からは、法経第一が使われないようでは、学園復興など、何の成果もないにひとしい、という思いが次々訴えられた。実力で、教室を開け、総会を強行しようという意見も出された。一方、会議の成功ということを考えると、せつかく同志社が会場を用意してくれているのだから、そこに総会の会場を移して、そこで、この問題も含めて論議をしようという意見も出された。これは、遠くから来ている学生たちの中に支持されていた。

私は、その模様をしばらく観察して

いた。実は、私は、その前日に開かれ

た指導部の会議で、この場の「現場責

任者」に指名されていたのだった。最

終的には、私が、判断をしなければな

らない。遠方からやつて来た学生たち

の思いを尊重しなければならないと、

私は決断した。自転車の荷台に上がり、

次のように演説をした。

「みなさん、この時計台前の広場は、

二十年余り前、滝川事件の際に、数千

の学生が抗議の集会をした場所です。

その大きなもり上がりがあつたにもか

かわらず、ファシズムは、大学の自

治を踏みにじつていきました。私たち

はいま、そのとき以上の大きな力を結

集し、ファシズムと再軍備に反対す

る闘いを組織しなければなりません。

そのための討論の場を、せつかく同志

社大学が設けてくれています。そこに

移つて、いま私たちが目の前にした現

実をも含めて、学園復興の道筋を論議

しましょう」

参加者は、私の提案を受け入れてくれ、同志社に移動して総会が開かれた。

## 学園復興会議の一幕

「我等が未来のために」によると、

「始めに各界の代表を迎えて公開討論に入った。日教組の南氏は、階級を超えた闘争をしなければならぬ事を述べ、井上京大学生部長は、学問の自由のためには先ず設備を充実せねばならないと云われた。同大父兄会会長米田

光正氏は、私大への国庫補助を叫び、又その他二、三の人がメッセージを述べた。がその後六時まで討論して、七時からは翌日の活動について討論、九時頃散会した。」とある。

ここには書かれていないが、このとき、私は忘ることのできない記憶がある。それは、この総会の議長をしていた京都府学連委員長の大島渚君が、会場内からの発言に対して、はげしく反撥して、暴言を吐いたのだった。議場は騒然となり、ついには、「議長不信任」案まで出されるという、こんな会合ではめったにない事態となつた。私は、舞台の奥に大島君を呼び、説得をした。最終的に彼も、自分の発言を撤回して、謝罪をして納まつたのだが、彼の「切れやすい性格」を目の当たりにしたできごとであった。

このときの経過を、私はかなり詳しく述べて、いま小山田和子に書いている。(十一月十一日付)

「学園復興会議は、全国から五百の代表があつまり、第一日目は、会場の混乱と、議事運営のまずさから、少々氣をつかいましたが、二日目からは分科会に入り、予想外に着々と進んでいます。部分的な欠陥はあっても、それはこの会議の大きな成果の中では、今後克服しうるものであると思います。法経第一教室をめぐる大きなたたかいはかつてなく激しいたたかいになりました。それは学園の復興を喜はない、大連文相につながる官僚機構をつちくだき、京大を国民の大学にするたかいであるだけではなく、関西一円の大学に、京大が占めている位置から考えて非常に大きな意味を持つています。だからこそ、末川先生が、法経第一を使うこと最も強く主張しておられるのです。連日のようにもたれる非合法の抗議集会は、雪だるまのように参加者をふやしています。学校権力は大きく動搖しています。先月二十七日のデモに際して、テモ隊が門をのりこえて入つたのにに対する服部学長の抗議は、反対に、同立、学の三学長から、逆抗議され、服部学長は、大連につながる内藤庶務課長と、滝川幸辰を頭にするボス教授と、学生と、多くの良心的教授の板ばさみになり、ついにそのどちらにもつぶ」との出来事として、昨日辞任しました。

学園復興会議を単なる会議に終らせないで、今、全国的に闘われている吉田打倒の闘いの一環にするために、大きな、天皇事件以来の大きな闘いがつけられているのです。(中略)

法経第一のことについては、いざれよくお話ししたいと思います。それは非

常に重要な、思想的な問題を含んでいます。(中略)

六日、七日とひらかれた女子学生大会の指導(学園復興会議に先立つて、西日本女子学生大会も開かれた)。この会議の中心になつたのは、立命館大学の学生で、全学連の関西駐在の中執加藤一子さんと、京大の梯葉子さんたちであったが、私は、この会議のサポートもしなければならなかつた。七日夜行われたこの大会参加者の、京大への非合法デモ、そして復興会議の準備等々で、徹夜がつづき、相当疲れました。そして一昨夜おそらく、とうよりは、昨日の朝早く、一時ごろ、指導部会議を終つてから、ブドウ糖をうつたのですが、しばらくしてから全身がふるえ出し、呼吸が困難になり、大騒ぎになりました。一時間ほどたつて、周囲におそつてくる発作も弱まりましたが、今日になつてもすっかりもどつていません。ひょっとすると、明日の総会の議長をやらねばならないかも知れないでの、今日は一日休みをもらつて、こうして下宿にいるのです。晩は、立命で、記念文化祭で、そこで、この前の歌の発表会があるので、それだけは出るつもりです。」

「この前の歌」というのは、学園復興会議のために、全学連が「学園復興の歌」を募集し、私の書いた詩が入選したのであった。だから、私は、関西学連委員長の資格ではなく、「入選歌」の作詞者「あかしごろう」として、その席に臨む予定であったのだ。

(以下次号、小見出しは編集部)

# 淹川事件以後

十五年戦争期京大学生運動の断章

(五)

岩井 忠熊

## 学生と人民戦線

重点を大衆活動に

淹川事件後に京大へ入学した活動的な学生は、時に二六会のような事件を経験してきた古い学生を「老人組」と呼んだらしい。学生多数の獲得や意識高揚のために研究会を重視することでは一致した。だが「老人組」の学友会費不払運動などでは意見が相違した。学友会費を徴収しても、それは学生課と運動部の連中に使われてしまっただけで、学生一般のためになつてないというのが不払いの理由である。だが新しい活動家は、学友会代議員選挙に積極的に参加し、会費を研究会や文化活動にも還元させるよう、学友会改革の方針をとるべきだとの意見だった。

結局新人の考えが認められ、三六年には一二〇人ほどの代議員の七割を左派がしめるようになったといふ。増山太助（成城 経一）や森信成（高知 文一）佐々木時雄らの活動家が以後も当選していった。この力で学友会予算の半分だけを運動部にまわし、あと半分を文化団体に出した。とくに学友会が編集権をにぎった『京都帝国大学新聞』に補助が出

て、編集長に前橋正三（前号に紹介）がなった意義は大きい。各研究会にも補助金が出るようになり、研究会の数が全部で三〇ほどにふえたといふ。

このような学友会活動の活発化まで「老人組」のリーダー格だった長尾孫夫は、左翼機関紙の再建、つぶれた党にかわる指導機関をつくって大衆を指導する必要をとなえた。だが新人の永島孝雄や小野義彦らは、党的組織をすぐにつくらない、機関紙をすぐにつくらない、学友会をボイコットせず民主化する、学生組織の支柱として学問思想の研究、学生の経済的・社会的権利の確保、戦争とファシズムへの反対という方針をとり、この方針への賛成者は三ヶタをこえたと小野は回想し

た。こうした大衆活動重視の方針は三五年コミニテルン第七回大会で決定された人民戦線戦術にそつたものである。またそれがつづいて一九三六年二月に岡野（野坂参三）田中（山本懸藏）の連名で出された「日本の共産主義者へのがみ（国際通信）」にそつたものと見える。だが京大の学生活動家がそうした新しい方針を

とるさいにそれらの国際的文献を参考したか否かは断言できない。人民戦線の方針はコミニテルン決議のすこし前から世界的に実践されつつあつたといえる。

春日庄次郎・竹中恒三郎らが三七年末に大阪を中心として結成した日本共産主義者団は、明らかに党的再建を目指していた。その団が京大的学生活動家団体（彼らの一部はひそかに『京大ケルン』と名のつた）に連絡をつけ、団への参加を求めてきた時には、学生たちが困惑したのは当然だった。その頃には『国際通信』も手に入つた後のはずである。さしあたってなすべきは指導機関や機関紙の発行ではなく、あらゆる合法的団体に進出してその中に地歩を確立し、発言の場を得ることではないか。学友会活動も『学生評論』もそつした方針の実践であり、それが人民戦線運動と信じていたのである。

『京都大学百年史』（二）が「京大ケルン」を機関紙名としているが、機関紙を出さないことが「ケルン」の方針だった。

ところが団は人民戦線を右翼日和見主義と批判し、まず学生の布施杜生（松本高文2）労農弁護士布施辰治の子息を説得し、永島孝雄に働きかけて「嵐をついて」「民衆の声」等の刊行物の「流し込み」がおこなわれた。永島や布施は団

との接触を自分たちだけにとどめようとしたが、機関紙や刊行物が学生たちに郵送されると、団の存在が知られるようになつた。非合法文書に接したことのない学生にはその内容に共感して学生間に広げるために持ち回り、中にはその刊行物をどこかに落としてくる者も出た。こうなると非合法組織の存在が警察に探知されるまでにあまり時間がかかるようになつた。

春日・竹中ら団の幹部は三八年九月に検挙され、一五八人が逮捕された。団の活動は実質一〇カ月にすぎなかつた。それ以前に先だつて三七年一月に『世界文化』関係者が検挙され、ついで『学生評論』の発行人草野がまず検挙され、三八年六月に第二次として藤谷俊雄、姉歯仁郎、関原利夫、永島孝雄、西田勲、内海省三らが検挙されていた。藤谷の回想では、団について村上尚治（高知 文3）から聞き及んだことはあつたが、すでに京都を離れて兵庫県の教職にあつたせいか、具体的知識はもつていなかつたらしい。

一年あと小野義彦らは文学部の活動家を集め、学生運動指導部を結成し、イソ語で「核」と自称し、人民戦線の一翼を自覚していた。小野は野間の『暗い絵』から出した「暗い谷間の時代」という見方に反対し、あの頃の自分たちはもつと明るく楽しくのびのびと運動していたという。小野は竹中恒三郎に会つて団の方針に反対し、参加を拒否していた。小

野たちの「京大ケルン」は「学生評論」や各研究会を自分たちが組織してきたことに自信をもっていたのである。だが小野が卒業して大学院に入つて間もなく藤谷も永島も「学生評論」で撃撃された。小野も三八年八月に応召入隊する。

藤谷は警察署の調査室で永島と出会い、刑事の隙を見て会話を交わした。「学生評論」は一度も発禁や削除の命令を受けたことがなかつたから、あくまで合法性を主張できる根拠はあつた。しかし「世界文化」関係者の例もあり、その主張はもはや通らない。共産党は存在しなくなつたにもかかわらず、治安維持法はひとり歩きして「目的遂行罪」の範囲を拡大した。「学生評論」を「国体を変革し私有財産制度を否認する」ことを目的とした「結社」とすることはむずかしい。だから参加者個人や一同がすこしでも結社の運動に寄与する意識をもつて行為したとすれば、それを「目的遂行罪」とするという拡大解釈をおこなうのである。

調査室で永島が藤谷にソットささやいたのは「学生評論」の運動は全体としては「学生評論」の運動は全体として民衆主義や自由主義学生の集まりだが、われわれは共産主義の立場から参加したといつめる唯一の道であるとの意見である。藤谷も永島の意見に従つことにした。その時に永島は藤谷の知らない共産主義者團についても語つたといふ。だがそれは、特に永島と團との関係が知られてしまつ以前のことと推測される。

藤谷はほぼ二年の獄中生活をへて、四員はその後も活動をやめず、新人活動家の「京大ケルン」も実質的に半年間の活動におわつた。「学生評論」はつぶれたが、広はんに組織された研究会と学友会代議

○年六月に懲役二年執行猶予四年の宣告を受けた。前後して、永島は大阪控訴院で懲役三年、内海は懲役二年執行猶予五年、西田も内海とおなじ判決を受けた。永島は共産主義者團との関係が知れたために実刑となり、四三年に肺結核の重症となつたために刑務所を出された直後に病死した。非転向のままの事実上の獄死である。

小野は自伝『昭和史を生きて』で自分の活動を「京大ケルン」とよんだが、増山太助は小野たちの「ケルン」は文学部の一部の学生運動対策部の自称であり、実は、「京大ケルン」は小野卒業直後の三八四年四月末に布施と野口俊夫（三高経農3）で結成され、五月に柳原正之（成城3）椋梨実（山口法3）を加えて活動を始めたとする。だが布施も野口も大衆運動の経験がないので、卒業後も京都の劇団「エラン・ビタール」にいた永島が援助したという。「ケルン」は団を支持

「ケルン」と称する組織はすこし時期をズラせて二つあつたことになる。布施、野口、柳原、椋梨は九月一三日に会合したところを、来合わせた学友会の増山もろとも逮捕され、「ケルン」は潰滅した。

布施は猛烈な拷問にたえ、秘密を守り、そのため彼の予審終結決定書には永島の名が登場していないという。永島と団との関係がどこから特高に知れたのかは、戦後も謎とされてきた。布施は四〇年に執行猶予で釈放され、上京して就職したが、猶予のさいの条件だった旧同志たちとの交際禁止を平気で破り、四二年に京都拘置所の独房で、栄養失調と肺結核の悪化が死因だった。彼の死は四四年二月四日、逮捕された。

京都拘置所の独房で、栄養失調と肺結核を生み出していった。それらは「京大ケルン」の遺産ともいえた。

内務省「社会運動の状況 昭和一六年」と渡部徹（六高経）の回想によると、

「ケルン」潰滅後にその影響を受けってきた

## 弾圧のピーク

学生運動の再建をくわだて、読書会、研究会、学友会活動に力をそいだ。三九年四月中旬に兩人は左京区大文字山麓に

ます永田と竹田が検挙され、約一週間後に一九人が逮捕された。そのうち二人はすぐに釈放されたが、結局起訴されたのは永田と竹田のほか禰酒太郎（経3）

するが、下部組織でない。従つて団の命令には無条件では従わないという性格規定をして団の承認をえたという。これが「ケルン」に加わらなかつた増山の証言である。

渡部は経済学部入学してから六高先輩の吉村に誘われて資本論読書会に加わったが、それが非合法とは気がつかなかつたという。ついで石川興二経済学部教

授指導の国民経済研究会に出席するようになり、永田が頻繁に接觸してきて、一〇月に学友会体育委員会の委員になつた。だが学友会といつても自主的に活動できる状況ではなかつた。四〇年に入つて新体制運動が展開され、学内新体制が提唱されると、それを利用して新組織の中にもぐりこんで、研究会や学友会活動の局面転回をはかるうとしたのである。

こうして渡部は所属する経済研究会の指導教官でちょうど「新体制の理論」を刊行してベスト・セラーになり、論壇で活躍中の谷口吉彦教授に働きかけて新研究会の結成をすすめ、賛成を得た。谷口は法・文・経学部にわたる大規模な新体制総合研究会を一〇月に発足させたが、三ヵ月後の四一年一月の学生弾圧で挫折した。

小野幸典（経3）服部泰敏（経3）吉村達次（経3）片桐盛典（経3）河野陽一（経2）と法卒の大野圭吉（同盟通信社員）であり、渡部と坂寄俊雄ら八人が起訴猶予となつた。起訴された者もみな懲役刑の執行猶予である。警察で彼らは暴行拷問を受けなかつたという。特高から見ても地下組織もなく数年前なら問題にならなかつた程度の行動だから、治安維持法違反は相当に無理なこじつけと承知している。

だが彼らが釈放された時はすでに対米英蘭開戦後であつた。結局ほとんど全員が兵役につかされ、渡部ひとりを除いて後はみな戦地に送られた。永田の渡部あ

て書簡は「きけわだつみのこえ」（岩波文庫）に収録され、全篇でただ一つ戦争について社会科学的な見とおしをもつた例とされてきた。なお児玉健次（聞こえますか命の叫び）（かもがわ出版、二〇〇六）は永田の日記を紹介している。小野はこの年の弾圧がピークで百数十人の逮捕者

があり、参考人として調べられた者を含めると二〇〇人以上になつたと推定している。

その後特高は卒業した者を学生時代の活動を理由に検挙しはじめ、四二年に大

阪で教職についていた森信成、同年に大坂で兵役についていた野間宏、市役所勤務の越川正啓、四三年に兵役で濠北タニンバル諸島にいた小野もはるばる逮捕状をもつてやつてきた憲兵に、それぞれ検挙され、小野は本土へ送還された。



▲渡部徹は「さんいち」（80年7月号）に太秦警察署留置場での特高の扱いを記している。特高の暇つぶしに近くの撮影所へ連れ出し、女優を呼び出しへ記念撮影したという（前列左より松浦妙子さん、森光子さん、後列中央は渡部、その右は特高刑事）

◀児玉健次編著『聞こえますか命の叫び－戦没学生永田和生の「軍隊日誌」』（かもがわブックレット、2006）の表紙



この事件については田島和生『新興俳人の群像』（京大俳句の光と影）（思文閣出版、二〇〇五）という好著にくわしいので、これ以上は述べない。しかし無季俳句を主張して俳句界の革新をくわだてた青年たちがあえて「京大俳句」と名のつたことには、京大の革新性に対する自負を見ることができるかもしれない。それにしても血迷った特高警察がそこまでやつたのかと驚かされるような事件である。

## 狂気の弾圧

### 京大俳句事件

一九四〇年二月『京大俳句』の会員八人が突然に治安維持法違反で逮捕された。その中に学生はいないし、本来は学生運動として取り上げるのはおかしい。『京大

俳句』は三三年一月に創刊され、編集兼発行人は平畠富次郎（静塔）で、京大病院の青年医師だった。発刊当時は関係者の多数は京大関係者だったが無季題俳句を提唱する新興俳句運動への賛同者が全国にひろがり、弾圧された当時の会員の

### 京大学生結核研究会事件

一五年戦争期最後の学生事件は、四二年九月に医学部学生が検挙され、翌年にはすでに陸海軍の軍医であつた人たちまでが軍法会議に付された「京大学生結核研究会」事件であろう。

当時の日本では結核が「国民病」とまではいわれ、その対策が国家的課題とされていた。医学部の学生たちが真剣にその研究を志したのは当然であった。だがたゞでさえ劣悪だった国民生活は戦時下の物資窮乏と総動員体制下の労働強化のためにさらに水準を低下させていった。化学療法が発達していないかったその当時、患者は安静と栄養しか対処法がなく、結核をめぐる状況は深刻をきわめていた。

若い医学生たちは教師・先輩に教えられながら調査法を学び、四年に厚生省の後援で福井県勝山町（現勝山市）の保健所長の指導の下に、同地方の工場（主として織物工場労働者）について調査し「勝山地方に於ける工場労務者の調査報告」をまとめた。弾圧後、ながらその報告の存在が不明となっていたが、復刻版編集委員会編『開戦前夜の京大医学生の調査活動－そこで昭和女工哀史をみた』（医療図書出版社、一九八三）として日の目を見た。ものものしく「防諜上取扱注意」と印刷され、福井県衛生課長の序がついている。

学徒実務班として桂大典、戸島寛平、津田安、中尾庸夫、清水強三、小田直行、土居靖徳、金森熙隆、今村雄一、成田至、正谷淳一、森厚、足利八郎、嶋谷正夫の工場労務者の栄養調査、第三編女子労務者の社会婦人科学的調査、第四編工場労務者の生体測定から成っていた。

戦時下のこのような実態調査は、為政

者にとつても必要かつ有益だったはずである。にもかかわらず関係者が検挙され、報告書が公開されなかつたのは、貧困と結核の関係を科学的に調査すること自体が、非人道的な戦争の強行のために有害と見なされたのである。それにしても治安維持法違反とはなんとしても理解しがたい。当時の知識分子、学生であれば左翼本の若干を持つてゐることはごく普通であつた。四〇年ごろまではマル・エイン全集も普通の書店で買えたくらいである。だが事件の関係者がそうした文献を所持していれば、特高は無理にも事件と左翼運動との関係をあげつらい、治安維持法の目的遂行罪にでっち上げるのが常例であつた。ただこの事件の関係者は全員が起訴猶予となつた。検察当局もこの事件を治安維持法違反で押し通すことはためらいがあつたのであらう。しかし、学生たちには過酷な処遇が待つてゐた。

かつての学生たちはすでにほとんど陸海軍の軍医として勤務し、ごく一部が、多分、病身のために大学病院の医局にとどまつてゐたようである。陸軍では関係者を軍法会議により出し、それら軍医を「軍籍離脱」させた上で二等兵に降格した。衛生兵として働かせたらしい。海軍では軍法会議の取調べをおこなつた上で、軍医のまま「戦死配置」とされていた激戦地に送つた。その中には戦死者も生存者も出たが、一たん戦死者として公報にのり、進級までしたのに生還した人もいたらしい。

この事件の検挙者は松江高校と三高の

出身が異常に多く、姫路高校出身者をふくんだ。なお「特高月報」等によると、これら医学生たちの読書会に参加して検挙された人たちは、医学と関係のない同志社大講師岡田良夫（戦後京大教養部教授）、齊藤幸（農3）岸谷四郎（経2）があつた。社会科学文献理解のチューダー役をつとめたらしい。

前掲「私たちの滝川事件」に執筆した東大図書館前芝生での学生集会への参加者が、一九四一年に新聞記者として取材のためそのなつかしい芝生で見聞したのは、上半身を裸になつた学生たちが「海ゆかば」をうたう姿だつたという。その年の暮れには対米英蘭宣戰布告となつた。あれからたつた八年である。

京大では一九三九年五月、学生課主催の日本文化講義として田辺元教授が「歴史的現実」の講演を六回にわたつておこなう、同年に岩波書店から刊行された。大教室が聴講者で満員になつたといふ。この頃から京大哲学を中心とする「京都学派」が、「大東亜」戦争の世界史的意義を積極的に説きはじめた。一切の批判的抵抗の沈黙の後に、四三年一二月には多くの学生が「学徒出陣」していった。

（学生の出身高校や学部・学年等の表記や裁判判決等はできるだけ調査したが、十分な正確さに自信をもつには至らなかつたし、表記上の統一も多少の混乱を残した。不備の点は御指摘を受けた。なお史料や参考文献については別の機会に明らかにしたい）。

（終）

## BOOK

### 50年代、京大教授陣に米が反共工作—米公文書で判明

## 京大教授陣が反共工作に作

50年代、世論を誘導

映画制作支援も



知識人と大衆

10月22日付「京都新聞」が「ワシントン21日共同」で報じた記事。1950年代に日本の左傾化を恐れた米広報文化交流局（U.S.I.S.）が、左派勢力が強かつた京都大学の教授陣を対象にした反共

国に順次派遣して反共派に育て、帰国後もU.S.I.S.と接触を続けるとともに、各学部の主導権を握り、左派封じ込めに成功したとしている。

が協議、吉川幸次  
郎文学部、高坂正  
S.I.S.神戸支部

機感を抱いた服部  
峻治郎総長とU

は、52年に左派教  
授陣や全学連など  
の影響力拡大に危  
惧感を抱いた服部  
峻治郎総長とU

は、52年に左派教  
授陣や全学連など  
の影響力拡大に危  
惧感を抱いた服部  
峻治郎総長とU

歌集 希い 真田 玲子

夫と仲間の眠れる青山靈園に 娘らと  
参らん秋を待ちわびる

夢にでも戻りたまえと夫のシャツ抱け  
ど残り香はうすれゆくのみ

どうしようもない悲しみをうたうこと  
が、著者の作歌の原点にある。しかし一  
方で地域での活動の中で、未来への展望  
を失わない。

署名簿にもみじ影さす龍安寺異国人の  
ところ通わす

九条のポスター地域に五十枚貼りても  
足りず熱きおもいに

痩せに瘦せ尖りし肩に鞠かけ集  
中講義に夫（つま）は出てゆく

（四六判158頁上製本、私家本）

工作を行つていた  
報告書が米国立公  
文書館で見つかっ  
た。

# 忘れ得ぬ人

安井信雄先生



安井信雄（やすいのぶお）

1906年、兵庫県多紀郡篠山町生まれ。生家は材木商。27年、京都帝国大学医学部入学、黒木重徳の指導する学習会に入る。31年、京大卒業、33年から医学部副手として研究室に通うかたわら吉田神楽坂で夜間診療を始める。37年、田中野神町にて自宅開業。41年、軍医予備として徴集されハルピンへ。43年、病気により除隊、開業医に。45年、河上肇の主治医に。日本共産入党。47年、京都市会議員に当選（75年まで7期28年）。55年、安井病院開設、院長。56年、京都民医連会長。76年1月21日死去、69歳

—『安井信雄小伝』より—

一九三八年の八月か九月のことだつたと思う。そのころ私たちの家族は一乗寺塚本町に住んでいた。その家に父が帰つてこなくなつてもう何ヶ月か経つていた。父は東京へ仕事に行つていて妹と八歳の私は、母に連れられて徳島の父方の祖父母を訪ねて帰つたばかりの頃だつた。

その妹が高熱を出した。疫痢という診断だつた。当時、疫痢は法定伝染病の一つで、死亡率の高い病気だつた。その後に起こつた一つの光景を私

は忘れることができないでいる。  
妹は玄関に近いあかるい一部屋に寝かされていた。玄関を荒々しく開ける音がして五、六人の男の人が折り重なるように入つてきて妹のそばに座つた。その中に父がいた。父は手錠をは

## 「安井のおじちゃん」は姉妹の命の恩人

められているように思つた。それから「すぐ、入つて来た時と同じようにせわしく男たちは飛び出していつた。

安井信雄先生であつたことが、大人たちの会話の中で、少しずつ分かつてきしたことだつた。いつ私が全快したのか、いつ妹と母が帰つてきたのか、全く覚えていない。ただ、我が家では信頼をこめて、「安井のおじちゃん」と呼ばせていただいたお医者様が私たち姉妹の命の恩人だということは、私の心の奥に深く刻み込まれてい

うな気がした。病名は「紅熱、これがも当時は法定伝染病の一つだつた。付き添いに小母さんが一人泊まりこんでくださつた。我が家が隔離病棟のようなものであつた。お医者様は毎日往診してくださつた。このお医者様が安井信雄先生だった

直後に母が付き添つて妹は入院した。家中が消毒され、そこに私一人が取り残された。次に気づいたときは、私自身が寝かされていて、白衣のお医者様が私の顔を覗き込んでいた。「どうや、気がついたか?」といわれたよ

うな気がした。病名は「紅熱、これがも当時は法定伝染病の一つだつた。付き添いに小母さんが一人泊まりこんでくださつた。我が家が隔離病棟のようなものであつた。お医者様は毎日往診してくださつた。このお医者様が安井信雄先生だつた。京都大学在学中に社会主義学習サークルに参加しておられたことからも、田中という貧困層の患者を意識した医療活動に取り組まれたことからも、安井信雄医師が、我が家だけでなく、「世界文化」の周辺にいた父の仲間たちの家族からも深い信頼を得ておられたような気がするのである。

戦後私たち家族がそろつて岡山から京都に移り住むようになつたのは、一九五〇年の八月一六日のことだつた。この時安井信雄医師は日本共産党的京都市会議員になつておられた。翌年四月に第二期の市会議員選挙があつたとき、私は安井家に泊り込んで選挙のお手伝いをした。そのことに父も母も異存はなかつた。ほんの僅かだけれども、我が家ではご恩返しのような気持ちがあつたようだ。

（川合葉子）

### このコーナーの原稿募集中

「私にとつて忘れられない人」「伝えておきたいエピソード」など、京都の民主運動に関わつた故人の思い出を綴つて下さい。1500字程度、写真があれば付けてください。

京都市上京区堀川通出水西入

かもがわ出版 気付 「燎原」編集部

湯浅まで。

メールアドレス yuasa@kamogawaco.jp

『京都・左京の十五年戦争』（かもがわ出版）の中の藤井洋一さんの文章によれば、田中野神町で安井医院を開

## 布施杜生の生涯を偲ぶ

### 10月例会の報告

年2月、京都拘置所で栄養失調・肺結核のため死去した短かった生涯を偲びました。

10月11日午後、かもがわサロンで開かれた民主運動史を語る会10月例会は、清水千鶴さんから「レッドページの思い出」を語つてもらう予定でした。

でしたが、病気のため出席できず、代わりに岩井忠熊代表が「15年戦争期の抵抗運動の一面—布施杜生を中心」と題して報告しました。

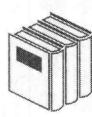
岩井氏は、当時の京大文学部が学生運動のメッカになっていたことや、布施の文学活動について紹介、44

時15分、京都大学時計台記念館1階周年記念ホール。第1部河上肇講演「河上肇の文化経済学志向—『貧乏物語』を中心に」池上惇（京都大学名誉教授）、第2部は高田記念講演。京都大学経済学研究科主催、入場無料。

### 催し案内

京都大学河上肇・高田保馬記念講演

会 11月20日（火）午後5時30分～8時



編 集 後 記

## 民主運動史を語る会例会案内

12月14日（金）午後2時～

会場 かもがわサロン

上京区堀川通出水西入 ☎075-415-7902

### 「レッドページの思い出」

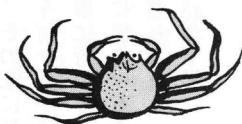
河本 清さん

（元全通簡保、元城陽市教育委員。  
城陽市在住）

全通簡保における文化運動、労組活動

## 情報

### スクランブル



治安維持法国賠同盟府本部が総会

治安維持法犠牲者国家賠償要求

同盟京都府本部の22回総会が10月6日、ハートピア会議室で開かれ、「昨年度に続き財政活動の強化と、五百人会員めざし奮闘しよう」などの方針を決めた。

役員は会長＝岡本康、副会長＝



三原哲、高橋きみ、事務局長＝宮城日出年。



京都原水協が50周年のつどい

結成50周年を迎えた原水爆禁止

京都協議会は10月13日、京都市内で記念のつどいを開き85人が参加、小冊子「原水爆禁止運動の前進と京都原水協50年の歩み」が配布された。



京都子どもを守る会が55周年



10月28日午後、京都教育文化セ

ンター会議室で「55周年を祝う会」を開催、55年の歩みのスライドが上映された。



京都労演が50周年記念事業



京都勤労者演劇協会（京都労演）

は1956年12月に産声を上げ、昨年から今年を創立50周年と位置づけ、50年誌の発行や50年展など記念事業を行っている。11月4日にはルビノ京都堀川で記念レセプションが開かれた。



京都国公が結成50周年



京都国家公務員労働組合共闘会議は10月13日、結成50周年記念レセプションをタワーホテルで開き

100人が参加、冊子「50年の歩



新年号に名刺広告をお願いします

団体のみなさまに名刺広告をお願いすることになりました。一冊五千円で何冊でも結構です。一口について一部の「燎原」を1年間お送りします。なにとぞよろしくご協力ください。1月号に掲載します。

京都の民主運動史を語る会